

述 懷

湘波漁夫

富とみをうらやむことなかれ

自然じぜんのらくは貧ひんにあり

玉たまのさかづきかゝやきて

盛もる酒さけいかにうまくとも

夕ゆふがほだなの下したすゝみ

まとひたのしきはらからが

くみてすゝむる一いぱいの

にぢりの酒さけにしかめやも

かれにながむる庭にはあらば

吾われにたがやす田たはたあり

かれに乗のるべき馬車ばしやあらば

われによむべき文ふみはあり

よしもつ筆ふではほそくとも

みさをの節せつはあるものを
民たみのあぶらに肥こえふとる

はねなき人ひとにおとらんや
花はなのころもはまとなねど

おなじ雲井くもかに澄よみわたる
月つきをながむるわれなれば

おのれが運うんにやすらひて
不正ふせいのとみはうらやまじ

不仁ふじんのさかえねがうまじ

◎短歌募集

△課題 隨意

△切 毎月末日

△發表 本誌上

△賞品 三光に粗景を呈す

△選評 眞宮起雲

△投稿 用紙は隨意にて左記の所に送らる可し

但添削及返稿を要せらるゝ方は往復はがき
又は切手封入にて送られたし

「伊勢國白子局區内みどり短歌會」

短歌

眞宮起雲選

(天)

京都中村鶴聲

小さけれど香も色もまた詩の神の召しに榮えむか
露草の花

(地)

紀伊高木白星

春夕べ袖かみしめて物おもふ少女のかたに紅梅の
ちる

(人)

東京田邊孝

錦きて歸るとちかひうらぶれて母のみ慕にひと夜
あかしぬ

懺悔の情言外にあふれたり

○

田中三舟

蝶々の軽きつばさに歌のせて春の朝を風ぬるう吹
く

落ぶれて獨春泣く我世とも知らで鶯囀り冴ゆる

○

山翁

さ、川に繪筆洗へば彩なして流るゝ水に梅の花ち
る

金字塔愛の光りに高照りてしこ世の暗を永久に破
るか

○

紫薫女史

美しくしき繪日傘つゞく京の街花のかんばせ袂にゆ
るゝ

宵殿に姫がたしみの琴もれて朧の月に梅の香しろ
さ

○

せめてもの思ひをこゝに忘れんと花ちる宵を泉回
りし

○

大西益子

我悶え神に告ぐれば罪の影漫ろ碎けて雪とぞ消え
な

舞姫の舞ひの手振りに興湧きて立ち去りかねし夜
櫻の宴

○

田邊孝

春寒う愁ひに沈む籠居や歌思はする紅梅の花

うたゝ寝の夢野に舞ひの姫出でゝ戀の譜歌ふ春の
宵哉

○

田邊孝

春駒に黄金づくりの鞍おかせ花野かけらば我世も足らむ

○ 林 静 子

夕雲の影を見送りそと泣かむ我運命をば誰が知るらむ

○ 岡 野 艶 子

春寒を柱によりて怨じぬる夕べ漫ろに我身かなしき

○ 吉 川 紅 花

花陰を除ろ歩みの姫君が元祿小袖風に亂るゝ

○ 長 谷 部 和 子

うち笑まむ笑まひはよしやひくゝとも世に入れられで泣かじとぞ思ふ

○ 清 水 光 風

春潮に薫る藻の花白うして朝日うらゝに光りかびぬる

えせ戀をつゝむこの胸われ乍ら悶え焰と身を焼きたつくせ

○ 飯 塚 曉 霞

うらゝかに春の日浴びて罪もなく野に戯れし昔か

もほゆ
花かげにちりしく花を褥とし一夜まどかの夢や結ばん

○ 西 尾 無 名

黒髪の長さ思ひに春の夜の月光りなり更けに更けたる

憂ひ子の歌の一ふし好き聲に上しまさなば我願ひたる

○ 高 木 白 星

春風の厚き情にそと笑みて匂ひうつくし紅梅の花朝明けの風は真白き花に見えてまだ閉されし姫の殿居や

○ 起 雲

小さきく骸に仇す我世とも知らでえせ詩に年老いにける

夢のごと真白き花につゝまれて點思興ある春のわめつち

* * * * *